＜報　告＞

中央大学保健体育研究所講演会

日　　時:2009年11月11日　（水）　午後16：35～18：00
演　者:及川 晋平 氏　　金子 恵美子 氏　　田中 暢子 氏
テーマ:「車椅子バスケットボールから発信する人間教育と大学スポーツの新たな可能性」

＜講演内容＞

田中　今回、中央大学でこのように、障害を持つ方のスポーツについて話す機会を持たせていただいたことに、感謝申し上げます。

障害者スポーツ、皆さん聞かれたことはあると思うのですが、実は障害者スポーツという種目はありません。障害のある方に、「何のスポーツをやってますか」と聞いた場合、「障害者スポーツ」とは答えられません。皆さんと同じように、「バスケットボールをやっています」と答えられるでしょう。では、私たちはどのように障害者スポーツを考えていったらいいのかという話を今日、皆さんとしていきたいと思っています。

簡単にですが、私の自己紹介も含め、私自身も実は及川さんと同じ骨肉腫でした。左足は義足を使用しております。義足といいましても、ひざ上の切断でして、階段を上がるときには１段ずつ上がったりします。そのような私が今、中央大学でなんと体育の実技を持たせていただいています。中央大学には、教育の場にいさせていただけることを感謝とております。

今、国民の5%が障害者などといわれていますけれども、実はもっともっといると推測できます。この数はあくまでも登録者数なのです。障害者手帳を登録した人の数なのですね実は皆さんの身近にいて、周りに気づかれないだけなどということもありえるのではないかと思います。

障害というものをもっと身近に考えていただきたいということで、今日、車椅子バスケットボールというものを一つの題材にしていきたいと思っています。

また、私が長く話してもいけませんので、ディスカッションのほうでと思いますので、まずはマイクを及川先生のほうにお渡しし、車椅子バスケットボールの魅力、スポーツとしての面白さのようなものをぜひお伝えしていただき、金子さんには、いわゆる支援者として、車椅子バスケットボールを普及していく活動のお話などを、興味深く伺っていきたいと思っています。1時間半ですが、務めさせていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

及川　改めまして、及川晋平と申します。私はここにも書いてあるように、ＮＰＯ法人Ｊキャンプの理事長であり、東京都に所属する車椅子バスケットボールチームの「ＮＯ　ＥＸＣＵＳＥ」のヘッドコーチ兼プレーヤーをしています。今日はこの「車椅子バスケット

ボールから発信する人間教育と大学スポーツの新たなる可能性」という題名、何かとても堅苦しいのですが、僕自身もこれが例えば人間教育につながるのかとか、大学の新しい可能性につながるのかというのは、まだしっかりと分かっていません。ただし、このようなことを突き詰めていくとつながってくるのではないかと思って、これはある意味スタートといいますか、僕にとっても挑戦であって、このようなところで話をして、皆さんと情報を共有することによって何か可能性を引き出していければと思っています。

簡単に、僕がどのようなプレーヤーだとか、障害を持った経緯を説明します。今は株式会社日立システムアンドサービスというところの法務・広報部で、ＣＳＲ推進グループというところで働いています。車椅子バスケットボールとは特に関係ないのですけれども、会社の中で障害者、または会社としてそのような障害者をどのように受け入れてくるのかであったり、障害者のスポーツの発信をすることによっていろいろな理解を進めたり、そのようなこともかたわらでやったりしています。

車椅子バスケットボールに自分が会うまでの経緯ということなのですけれども、先ほどの田中先生と同じように、私は16歳のときに骨肉腫になって、17、18、19、20歳ぐらいまで闘病生活がありました。再発をしていくと、ほとんどの人が死んでしまうような病気なので、足を切断するという決断をして義足になりました。そして22歳のときに、車椅子バスケットボールに出合ったのです。

そこから車椅子バスケットボールを始めていったのですけれども、最初は22歳のとき、千葉ホークスに入部して、それから「車椅子バスケットボールをやりたい。本当にやるためにはアメリカに行こう」というのも一つあり、障害を負った自分自身のコンプレックスのようなものを何とか解消したいということで、思い切った挑戦をしようと、アメリカに留学をしました。

最初に行き着いた先はシアトルというところで、今イチローがいるところですね。車椅子バスケットボールのチームを探したところ、ＮＢＡというバスケットボールのプロチームが持っている車椅子バスケットボールチームというのがあって、シアトル・スーパーソニックスというチームの車椅子バスケットボール版のようなところに最初は入りました。

あるときは3万、4万人ぐらいのドームの中で、ＮＢＡ選手たちがプレーしている中のハーフタイムショーでやらせてもらった経験があります。

そのあと、やはり全米でもトップのチームでやりたいということで、その年に全米選手権に優勝したカリフォルニアのフレズノというチームに移籍しました。それからサンノゼ、またはＮＢＡのゴールデンステイト・ウォリアーズというチームの傘下にある車椅子バスケットボールチームに移籍して、4年間、大学生活を送りながら車椅子バスケットボールをしました。

ここで簡単に、アメリカはどのような感じの環境なのかというのをお話しします。まずはクラブチームレベルだと、ＮＢＡのプロチームは大体、車椅子バスケットボールチームを持っていて、例えばシーズンの中でたまにハーフタイムショーで一緒にやってみたりとか、地元の中でたまに、年間に1回くらいですが、交流があったりとか。そのようなことで地元の人たちにも理解してもらったり、サポートしてもらったりするような環境があります。

もう1つ、特徴的なのは、大学の中で「車椅子バスケットボールプログラム」というのがあって、それはイリノイ大学が特に有名なのですが、まず奨学金制度のようなものを使って、全米中の車椅子バスケットボールができる高校生を引っ張ってきて。もちろん文武両道で、スポーツ推薦で受け入れて、毎日部活のように車椅子バスケットボールをやる環境があります。大学選手権、またはそれこそ全米選手権に出ていくような、普通のスポーツ推薦をされている選手たちと全く同じような環境で、障害者をそのまま大学の中でアスリート選手として受け入れています。

実はアメリカではこれはもう20年前ぐらいから進んでいて、今では８大学ぐらいがそのような制度で車椅子の学生を大学に受け入れて、勉強とスポーツを両立させながら大学生活を送っていく、というようなプログラムを進めたりしています。最近ですとカナダであったり、オーストラリアのシドニーであったり、そのようなところでも、世界中にそのプログラムは広がっていきつつあるようです。そのような環境があります。

そのようなところを見つつ日本に戻ってきて、千葉ホークスというチームで何度か日本選手権の決勝戦で優勝したりもしました。そのような経験を通して、元々アメリカでやってきたことを何とか伝えたいということで、福島のチームに行ったりして、現在はＮＯ　ＥＸＣＵＳＥというチームを作って7年やっています。日本代表では、シドニーの世界選手権やパラリンピックにも出場しました。

車椅子バスケットボールというのを多分、聞いたことはあるけれども実際に見たことがない方もいると思うので、簡単に説明したいと思います。

ルールは一般のバスケットボールとほぼ同じ。1チーム5人で編成され、一般のバスケットボールと同じコート、ボール、ゴールを使用。車椅子のワンプッシュはバスケットボールの１歩に相当し、連続して2回までプッシュが許される。それ以上プッシュするとトラベリングとなる。　一般のバスケットボールとルールが大きく違うのは、選手に持ち点があるということ。障害レベルの重い順に1.0から4.5の持ち点が定められており、試合中、コート上の5人の合計が14.0を超えてはならない。この持ち点制が予期せぬドラマを生む。

以上が簡単なルール説明です。基本的なルールはバスケットボールと全く変わりません。コートの大きさだったり、リングの高さだったり、例えばスリーポイントの距離だったり、そのようなところは全く変わらず、普通の体育館でできます。

二つめに、ダブルドリブルがない。ボールを持ってドリブルし、またボールを持ってドリブルすることが車椅子バスケットボールに限ってはできます。

トラベリングという、3歩歩いたら反則という普通のルールの代わりに、僕らは足が使えないので、3回プッシュしたらスリープッシュという違反になります。ただし、２回プッシュして、ドリブルして、また2回プッシュしてドリブルするということで、常にドリブルしながら、前に進むことはできます。

次に、持ち点ルールというのが、実は車椅子バスケットボールで、一つのとても大きな特徴になります。1点から4点まで、実は１、1.5、2、2.5、3、3.5、4、4.5という点数がそれぞれの障害に応じてつけられます。では、それぞれの障害とは何なのかというと、簡単にいうと、車椅子に乗った状態での上半身のバランスでそれぞれの持ち点が決められます。

1点の選手は、上下左右のコントロールが基本できない、ボールを持って体を倒すと起き

上がってこられないということです。必ずどこかを支えて戻ってこなければいけない。腹筋と背筋と側筋が使えない選手、このような選手を1点。

2点は、上下左右のコントロールが弱い選手。3点ぐらいになると、今度は、上下は利くのだけれども、横に倒れると戻ってこられない。4点選手は、上下左右どちらでも利きますということで、車椅子に乗ったときの上半身のバランスで持ち点が決められていて、この持ち点の合計、バスケットボールは5人でやるので、5人の合計が14点以下で作らなければいけない、というのが非常に特徴的なルールです。

したがって、僕は 4.5なのですけれども、僕のように上下左右が十分に利く選手が、5人でチームを作ることはできません。僕は大体1点の、上下左右が十分にコントロールできない選手と必ず組み合わせてチームを作らないと出場できないというところに、車椅子バスケットボールの特徴があります。つまり、シュートがみんなできる選手が５人集まってチームを作っていくわけではなくて、一つのシュートを作り出すために、いろいろな役割の人たちが自分の障害に合わせてチームを作っているというのが一つの面白いところでもあります。だから僕などは、例えば1試合20点、30点入れるのですけれども、1点の選手がいないとその20点、30点は、実は取れない。ただ、その選手は障害が重かったりして、僕をいかにうまくバスケットボールに近づけるかとか、シュートを打たせるかというのに徹してくれている。そのようなところにそれぞれの理解があったりとか、例えば「俺ができるんだから、おまえもできるだろ」というような価値観は通用しなくて、皆さんがそれぞれ違うという中でのスタートから一つの目標を作り出すというところが、車椅子バスケットボールの一番の特徴なのではないかと思います。同じ土俵、同じ領土の中にスタート地点がないということ。みんな違うということがすべてのスタート地点で、それぞれの可能性を引き出すことによってチームの可能性が高まってくる。このそれぞれの可能性を引き出すために、それぞれを理解する。例えば「この人はあれができないけれども、あれができる」というのも理解しなければいけない。僕にとって簡単なシュートは、彼にとってものすごく難しいシュートだったりする。だれが見ても簡単なシュートだろうと思うシュートでも、その障害からそれを作り出すことはものすごく難しかったりとか。そのようなことを細かく理解したうえで、一つの勝利というところへ向かっていく面白さというのは、車椅子バスケットボールにあるのではないかと一つ思っています。

金子　改めまして、金子と申します。私からは、及川と私、仲間たちでやっていますＮＰＯ法人Ｊキャンプというのがあるのでが、その取り組みについて簡単に説明をさせていただきたいと思います。

本業として東京都障害者スポーツ協会というところで勤務をしつつも、そのかたわらで、自分たちでＮＰＯを立ち上げるなど、公私共に障害者スポーツの振興に携わる活動をしているということです。

ＮＰＯ法人Ｊキャンプとはどのようなものなのかということなのですけれども、一番最初のきっかけは及川を含むアメリカ留学、パラリンピック出場経験のある３人のアスリートが集まって「何かやりたいよね」というところからスタートしました。

アメリカではバスケットボールに限らず、いろいろなスポーツのキャンプが行われてい

るのです。つまり、障害を持った人もいろいろなスポーツを楽しむ、あるいはいろいろなスポーツを知る機会がものすごくたくさんあるということなのです。これを日本でも何とかできないか、というところスタートさせたのが、ＮＰＯ法人「Ｊキャンプ」になります。

このＪキャンプというのは2001年からスタートしていまして、2008年にＮＰＯ法人として再スタートを切ったのですけれども、皆さんの中にももしかしたらいらっしゃるかもしれませんが、新しいことを始めるというと、結構変化を好まない方がたというのはやはりどこにでもいるもので、いろいろなことがありました。それでもなぜここまで、仕事でもないのに続けてこられたかというと、実は自分たちがやってきた活動に対して多くの方たちが、少しずつ少しずつ賛同してくださったという経緯があるのです。

事業理念としては、ここに書いてありますけれども、「車椅子バスケットボールの真の楽しさを伝え、人間の可能性を追求する」、それを私たちは理念として掲げています。車椅子バスケットボールを通じて、障害を持った人たちの可能性を広げていくことができるのではないか。それによって、その人たちが生きていく上での選択肢を広げていけるのではないか。そのように考えて、車椅子バスケットボールを広める活動をしています。

具体的に何をしているかということなのですけれども、2泊3日、あるいは3泊4日でサマーキャンプを毎年行っています。これを私たちは「Ｊキャンプ」というように愛称で呼んでいるのですが、全国から障害を持った方、持たない方を集めまして、大体1回に50名くらいの参加者が集まります。2001年から始めて８回行いましたので、延べ400名の方にご参加をいただいています。いつも、アメリカのイリノイ大学と提携をしていますので、イリノイ大学からコーチを招聘（しょうへい）して、日本のコーチとコラボレーションでキャンプを開催しています。

次に海外研修事業なのですけれども、例えば海外で行われているいろいろな大会に選手たちを派遣したりですとか、オランダとかイギリスとか、世界の車椅子バスケットボールの指導者が集まってきた研修だったのですが、こちらのほうにＪキャンプのスタッフを６名、送り込みました。

もう一つ大きなところとしては情報提供事業というのがありまして。障害者スポーツの世界というのは、まだ系統立った仕事ベースで成り立っているところが少ないので、どうしてもボランティアベースで物事を進めていくと、うまく機能しないことも出てきます。海外の情報などを本当に系統立てて収集するというのは非常に難しくて、私たちは幸いにも語学のできる人間が多くいるということもあって、国内・国外問わず、いろいろな情報を取って、それをよい形で皆さんに提供していくということをしています。

次に人材育成事業なのですけれども、今までまだ指導者というものがなかなか成り立っていない。指導者に限らず、いろいろな形で、人をまずは育成していくということをやっていく必要があるだろうということで、勉強会などを開催しています。

それから、講演、イベント事業ということで、例えば今年などですと、日本パラリンピック委員会主催で一般の方を含めたバスケットボールの体験教室を行いました。

最初に言ったＪキャンプ、私たちの骨格になるような事業なのですけれども、このサマーキャンプについてちょっと特徴だけ、説明をしたいと思います。

まず基本的には、泊りがけで朝から晩までみっちりやるキャンプです。実は理想として、

3泊4日でカリキュラムは組んでいるのですけれども、なかなかこれができない。ということで、実際はここのところ2泊3日になってしまっています。これはなぜかというと、まず一番大きな理由としては体育館が連日、終日予約が取れない。

もう一つの特徴が、障害の有無を問わずに参加いただけるということです。障害のない方も参加をしていただいているということです。

それを踏まえまして、2001年から8年間やってきた中でどのような傾向が最近あるのか、どのような変化があるのかということを少し話しますと、まず年々、本当に障害のないプレーヤーというのがものすごく増えてきています。実は最初は１人でした。今年に関していうと、半分が障害のないプレーヤーでした。当初は、車椅子バスケットボールをやっている障害のない人というのは、例えばご家族に障害を持った方がいるとか、あるいは医療関係者であるとか、要は何か関係しています、という方しかいなかったのですけれども、今は皆さんのような、本当に一般の大学生の方がほとんどを占めています。これによって、障害のない人だけでプレーをするというような状況が出てきています。

では、ここで何が問題といいますか、何がポイントになってくるかというと、障害のない人だけでやってしまうとクラス分けが成立しない、ということが一つ出てきます。ここが新たなる問題といいますか、一つの課題となっている状況です。

このことを踏まえて、今私が考えていることなのですけれども、私たちだからできる役割というのがあるのではないか、というように実は考えています。というのは、障害のある人を交えて、朝から晩まで車椅子バスケットボール漬けで、一緒になってバスケットボールをする。そのことによって、障害のない人も障害のある人を自然に、当然理解していくようになる。そのような場の提供を、私たちはまずできるという強みがあるのです。

結局のところ、障害があってもなくても、いろいろな状態にある人が一つの社会を形成しているというのはどこの場所でも一緒で、このようなことによって相互理解というのを促していく。相互理解があることによって、また言い方を変えると、相互理解がないと車椅子バスケットボールは成立しない。相手の障害がどのような障害か、相手がどのようなことができるのかということを理解しないとバスケットボールが成立しないので、おのずと理解せざるをえない。私たちは、そのようなことを皆さんにお伝えしていける役割を担っているのではないかというように思っています。

田中　ありがとうございました。ここからは本題である「車椅子バスケットボールから発信する人間教育と大学スポーツの可能性」という、先ほど及川さんから堅いかもと言われた、その標題にもつながってくるのではないかということを模索しながら話をしていきたいと思っております。

ところで、金子さんにお聞きします。どうして障害者スポーツというマイナーな世界にかかわるようになったのでしょうか。きっかけなどあればお話しいただけませんでしょうか。

金子　たまたま私が就職活動をしていたときに、障害者スポーツの専門雑誌の編集長から話を伺ったことがあります。アメリカで車の事故に遭って、車椅子になられた方でした。編集長は事故当時、アメリカの病院で目が覚めたら歩けなくなっていたのですが、まずす

ぐに言われたのは「あなたは、あしたから車椅子になりますよ。なので、車椅子生活ではこんなことができます。あんなことができます」という説明のされ方をしたのだそうです。車椅子である自分として何ができるかという可能性にポイントを置いた話を病院の中でされたということが、自分の中で非常に大きかったということを話されていたのです。

ところが日本では逆で「あなたは車椅子なので、これができません」という否定形の言い方で、可能性ではなくて不可能なことに焦点を当てた話し方をされるということに、ものすごく衝撃を受けたとおっしゃっていたのです。編集長は、障害のある人にもっと可能性を感じてもらいたいということで、スポーツが心身共に障害のある人を健康にして、可能性を豊かにしてくれるものだというように思って、障害者スポーツの雑誌を作るに至ったのだそうです。

私がＮＧＯの活動で国際支援をしていたときに思っていたのは、対象となる国の方たちが持っている力を引き出すお手伝いをしたいということで、活動をしていたのですが、「障害者のスポーツって、人間の可能性を引き出すものなんだな」というように感じ、興味がわいてきて、今に至るというような感じです。

田中　ありがとうございました。そのような意味では、先ほどのＪキャンプの中のキーワードの「真の可能性と楽しさ」というのを両方満たしてくれるのが、偶然の出会いと障害者スポーツという感じだったのですね。

及川先生が見る可能性といいますか、ご自身も障害を持たれてバスケットボールに出合って、自分で可能性というものをどのように考えていらっしゃいますか。

及川　可能性ですね。僕はもちろん、障害を持ってない自分も経験しているし、今、障害を持っている自分も経験しているので、何か二つの自分がいるというのはあります。もちろん障害を持ってないときは、障害を持ったら絶対嫌だなと。大嫌いだったし、障害者を見ることすら、ちょっと偏見があるような人間だった。昔です。自分が障害を持っても劣等感があって、それを克服するためにいろいろなことをやってきたわけですけれども。車椅子バスケットボールをしているときが唯一、障害とか自分のコンプレックスのようなものが、百パーセント取り除かれる瞬間を感じたのです。逆にいうと、普通の生活の中では、やはりすごいコンプレックスを感じている。ただ、車椅子に乗って、義足を外してバスケットボールをしている瞬間というのは、だれにもじゃまされないといいますか、自分は障害を持っていて嫌だとか、そのようなことを全く感じない世界がそこにあった。だからそこに飛び込んでいって、自分自身の可能性をどんどん、百パーセント自分の力が注げるという場所だったのだなと思って、可能性を感じています。

相互理解にもつながるのですけれども、障害者であること、または健常者であることというのは、例えば社会の制度上だったり、仕組み上だったり、教育だったりという中でそのスタンス、立場が作られていることはしょうがないと思うのです。そこが雪解けで理解し合うというのはなかなか難しいと僕は思う。だけれども、スポーツという切り口で、みんなが集まって勝利に向かったときには、実は障害者も健常者も変わらないという環境がそこにあるのです。自分が障害を持ってそこに行ってみたら、「障害とか、そんなの関係な

い。もう勝ちたい。バスケットボール楽しい。健常者が見てても、障害者が見てても、おれには関係ない。みんな楽しいよね。すごいだろ」という世界があった。だから、車椅子バスケットボールの中に魅力をすごく感じたし、自分自身もそこの中で気持ちよく、自然に前向きにいろいろなことをチャレンジできて、それが一つの自信となって、また新しい選択肢だったり、可能性に挑戦しようというサイクルになったと思います。

田中　例えばこの中に、数学が得意で計算が得意の人もいれば、英語が得意な人がいるように、何かそのようなお互いの特異性といいますか、二人の話を聞いていて、お互いだからできることを生かしていく、一緒に何かを作り出していくことの楽しさのようなことのお話を、もう少し聞かせていただけますでしょうか。

及川　どんどんディープな世界に入ってきてしまうのですが、持ち点制度があるということは競技のルール(14点の中で1点から4点の人たちを集めてやる)ですが、この1点から4点というのが、実は1,2,3,4というのが上下の優劣ではない。それは1点だから下手くそ、4点だからうまいとかいう物差しではないのです。チームワークというもので一つのものを作り出していき、それぞれの違いを認め合って、それから生み出される可能性を一つのチームとして作り出していく行き先に勝利があるのではないか、という考え方でスポーツを考えていくと非常に面白い。

田中　ちょっと分かりにくい学生さんもいらっしゃるかと思ったので簡単に説明すると、先ほど言っていた持ち点制度の1点ぐらいの人というのは、いわゆる障害が重たいというイメージでいいと思います。2点になって、やや軽め。3点になると、もう少し動けるようになって。4点になると、割と日常生活はそれなりにこなして。4.5というとそこそこ、ほとんど活動は大丈夫で。5点というと、もし皆さんが「車椅子バスケットボール、やろうかな」というと、5点選手になるという感じです。

及川さん、金子さんのお話しを伺っていくと、バスケットボールの面白さプラス持ち点制度をうまく作っていかなくてはいけない。お互いのいいところ悪いところを分かっていなければいけない、という話になってくると思うのですが。変な話ですけれども、喧嘩のようなものはないのですか。「おまえは障害が重いから、できないんじゃないの」のような、そのようなことはないのですか。

及川　葛藤だったりけんかだったり、もちろんありますね。でも、そこですごく面白いのは、明らかにできないことを「やれ」と言うことは、絶対言えないのです。僕はできてもこの人はできないという理解のもと、「おまえだってこんなシュート、簡単に入るだろ」ということを、障害が重くてシュートがなかなか届かない人には絶対言えない。そのような理解の中で、「でも、おまえだったらできるだろ」という、いらだちの中でのけんかは発生してきますね。

あとは「勝ちたい」というところに何とかつかまりたいから、「無理してでも頑張れ」のような。でもよくよく考えてみると、不可能だったりすることもあるのですけれども。

金子　私は逆に面白いなと思ったのは、障害の軽い人が重い人に対するジレンマという話があったのですけれども、その逆もあるということです。

皆さん多分テレビのＣＭなどでもご覧になったことがあるかもしれませんが、元Ｊリーガーの京谷さんという人で、今、事故で車椅子になっていらっしゃる選手がいるのですけれども。この選手は持ち点が1点、つまり一番障害の重い選手になるのです。例えば1点の選手、障害の重い選手は、自分のやれる範囲といいますか、自分のポジションに限界があるので、どうしても得点源として障害の軽い選手を頼らざるをえないというところがあって。そのようなものを「おまえ歩けんだろ。これぐらいのシュート、決めてくれなきゃ困るんだよ」のようなことを率直に言い合えるといいますか。それが言い合えるのは、多分スポーツというフィールドがあるからなのかなと、共有項があるからなのかなというように思うのです。

ですから、スポーツという一つの共通のツールを使って、障害が重かったり軽かったり、あるいはあったりなかったりというところを突き詰めて、最終的には越えていけるといいますか、それこそスポーツが持つ可能性といいますか深さというものなのかなと。

日常生活の中で何かを一緒に、例えば障害のある人とやってくださいと皆さんが言われたら、「障害のある人にどんなケアをしてあげなくてはいけないのか、ということばかりに気が取られてしまう」というところが、もしかしたらあるかもしれないのですけれども。何か一つのものに向かうというようになったときには、それを理解したうえでどのようなものを作っていくかと、次のステージに入ってくるのかという意味で、スポーツが持っている意味はものすごく大きいと感じます。

及川　僕も小学校とか中学校で講演をするのですけれども、車椅子バスケットボールの講演、体験学習とかをするときに、小学生とか中学生とかは「障害者イコール介護、福祉、お手伝い」、このような切り口で皆さんは学習をしにくるのですけれども、唯一このスポーツというのは全く違うエリアで、彼らはそのような形で僕らの話だったり体験をしてくれるのです。終わったあとに「楽しい」とか「格好いい」とか「自分もやりたい」とか、極端なことをいうと「自分が事故で障害になったら、車椅子バスケットボールやりたい」とかいうところまで思って、考えて、受け止めるというのは、いわゆるスポーツが持っているまた違った切り口なのかなとは、障害者を見るうえで、思ったりします。

田中　今日せっかく大学生の方に来ていただいているので、学生の皆さんに対する何か大きなメッセージのようなものも含めて、何ていうのでしょうか、いわゆる自分の得意なところを生かして社会に、特に自分がどのような立場を作るのか。車椅子バスケットボールなど正にそうですけれども、実は社会の構造にすごく似ている。車椅子バスケットボールという興味部会切り口を使っていただきながら、大学生の皆さんに何かメッセージがあれば一言ずつお願いしたいと思うのですが。

及川　僕の場合、普通に小学校、中学校ときて、いわゆる社会のレールの上に乗ってきたのが、いきなり障害を負って、ものすごくはじかれて。リハビリで復活して社会に戻ったら、もう何もないような。「僕はどうやって生きていけばいいのだろう」とか、自分で前に進まないと何も反響が返ってこない世界に入ったという感じがした。そしてそういう人が結構いっぱいいて、その中から苦しみながら、自分がやりたいことをやってきた人もいるし、自分の特徴を生かした人もいるし、どのようにして普通の、今の社会に入ってきたのかというのを見てみるというのは、すごく面白いと思います。

障害者スポーツというのかな、車椅子バスケットボールで僕が関わった仲間たちは、非常に面白いと思う。皆さんにとっては、人生のメインではないかもしれないが、ちょっと見てみる、のぞいてみるとか、関わってみるというのは、何か自分にとってヒントをくれるような気がしますし、ものすごくいい刺激になるのではないかと思ったりします。

金子　この仕事を続けてきた中で、実は去年、衝撃的なことがあったのです。ある都内の高校に、車椅子バスケットボール体験で招かれて行ったときの話なのですが、その高校はちょっと問題を抱えた学生さんの多い学校だったのです。激しいリストカットの痕がある子がいた学校だったのですが。そこに選手を二人連れて行ったときに、そのリストカットの傷が沢山ある女の子が「車椅子に乗ってるからって甘えてんじゃねーよ。あたしの方がもっとつらいんだよ」というようなことを言ったときに、衝撃が走って。そして、それを言えるその子が、すごいなと思った出来事だったので。

つまり何が言いたいかというと、結構障害があるという切り口で、障害のある人は大変で、ない人は大変ではない。では、障害という切り口はどこにあるのかと考えたときに、リストカットを繰り返して苦しんでいる子にとっては「車椅子に乗っているほうが楽じゃないか」という、そのようなイメージだったという切り口が、なかなか面白かったという話なのです。つまり、何かでラベリングをする。障害がありますとか、ないですとか。ラベリングなど結局、無意味なものなのだなというのをすごく感じています。先ほどの、バスケットボールは実は相互理解がものすごく実はキーになるということとつながるのですけれども、目の前にいる人に関心を持とうというような。目の前にいる人のことを見ようとすると、ラベルで張ったことではないものがどんどん見えてくるのかなというように思います。

人を一人一人見詰めることは、ものすごく大事なことなのだなというのを日々、仕事の上でもプライベートの上でも感じさせてもらっています。

そのような意味でも、周りに関心を持って、自分のことも周りのことも一人一人少しでも見ていくと、人生は面白いのではないか、ということがお伝えしたいと思います。

田中　ありがとうございました。本当に今お二人の話の中で面白かったと思うところは、実は私たちは、勝手に障害者・健常者と、簡単に線を引いてしまうところがあるのだけれども、人であることは変わらない。

変な話ですけれども、車椅子バスケットボールをやっていようが、そこに乗っていると、先ほどの写真にもありましたが、あの中に障害を持たない学生もいます。見た目で人間は

すべてを判断してしまうところがあるのですけれども、つきあってみると見た目とは違った面を発見できたりします。やはり車椅子バスケの一つの面白さというのは、何というのでしょうか、乗って経験した後に、つまらない色眼鏡を自動的に外してくれるのです。

そのようなものも含めて、本当に皆さんがもし興味を持っていただいた中で、障害のある人もない人も含めて、いろいろな人がいるという社会、それをちょっと経験してみたいと思ったら、ぜひお二人がやっているＪキャンプに参加したりとか、車椅子バスケの試合を見に来てもらうとか、ちょっと隣の人に声をかけてみるとか、帰りに席を譲ってみるとか、何かできることを考えて実行していただけたらうれしいと思っています。

＜講演会終了＞

演者プロフィール

及川 晋平
1971年生まれ。16歳のとき骨肉腫になりローテーションの手術をする。
22歳のときに強豪千葉ホークスで車椅子バスケットボールを始める。持ち点4.5。
1998年シドニー世界選手権、2000年シドニーパラリンピック、2002年北九州世界選手権の日本代表選手。
また、1年に一度海外のコーチを招待して行う車椅子バスケットボールキャンプのトータルコーディネーターも務める（NPO法人Jキャンプ理事長）。

金子 恵美子
1972年生まれ。公益社団法人東京都障害者スポーツ協会経営企画室勤務。
2000年シドニーパラリンピック、2006年トリノパラリンピック等にスタッフとして参加。
及川とともに車椅子バスケットボール関連団体としてNPO法人Jキャンプを立ち上げる。
日本パラリンピアンズ協会法人化にも関わっており、障害者スポーツ全般のマネジメントに深く携わっている。

田中 暢子
1967年生まれ。現中央大学兼任講師、保健体育研究所客員研究員。
国際研修生としてオーストラリアパラリンピック委員会、全豪知的障害者スポーツ協会に勤務。
その後、英国ラフバラ大学大学院（修士・博士課程）に進み、スポーツ社会学・政策学を専攻。
障害者だけでなく、ホームレスの人々や高齢者のスポーツ参加や健康問題についても研究を行っている。

学生の感想①

私は今回の講演で初めて 「車椅子バスケットボール」と出会いました。
「体の不自由な人のスポーツか」と思った私でしたが、自身が骨肉腫になってしまい、左義足をしながら中央大学で実技の体育講師をしている田中さんの 「障害者スポーツというものはない」という始めの言葉にぐっと惹きつけられました。

今回、短い時間だったにもかかわらず、NPO法人Jキャンプ理事長 NO EXCUSE選手兼ヘッドコーチをしている及川さんに「車椅子バスケットボールの魅力」についてたくさん教えていただけました。私が「車椅子バスケットボール」って深いんだなあと感じたのは、ル

ールに「持点」があるという点。車椅子に座った状態の上半身のバランスに1点～4点 をつけてメンバー5人の持点の合計が14点を超えないようにしなければならない点。言い換えると皆が「平等」にプレーが出来ないようになっているのである。普通に考えればやりにくそうだと思うだけだが、及川さんの考え方は本当に素敵だった。皆がゴール出来るのではなく、1つのゴールを作り出すためにそれぞれの役割があって、皆でその1本を
作り出すのが車椅子バスケットボールの楽しいところだとおっしゃっていた。また、面白いと思ったのは、下手な人が上手い人にジレンマを抱くのは当然だけど、役割が全く違うこのスポーツではその逆もあったりするとのこと。スポーツが持っている深さならではだなと感じました。

勝つためには1点の人の特性を良く知っていなければならないと金子さんはおっしゃっていましたが、これはある意味で普段の生活でも言える事だと思います。上に立つ者は支えてくれる人がいること、その人たちの力で自分が前に出られること、活かし方を知っていればそのグループなり企業は相互に支え合って飛躍できると思います。チームワーク1つを作り出すためにはプレーの上手さ下手さだけの物差 しでは測れないし、ましてや良いチームは作れないのです。

今回の講演を聞いて、障害者には 「福祉や介護が必要」といった固定概念が崩れた気がします。 もちろん、住みやすい環境を整えてあげることは大切ですが、スポーツを通すことで逆に私たちが教えてもらえることがこんなにもあったんだという事が分かりました。一口で 「障害」といってもラベリングされる切り口がどこからなのかなんて誰にも分かりません。ラベリングすること自体、無意味なんだと気付かされました。

障害を認めたくなかったとおっしゃっていた及川さん。自分で道を開かないと生きていけないからこそ前へ突き進んできた及川さんは「障害を持っていて可哀想」ではなく、「生き方がかっこいい！あんな大人になりたい！」 と思えました。
Jキャンプの役割である 「障害の有無を越えた相互理解」が今後もつと世界中の人に、そしてスポーツを超えて高められるようになって欲しいと思います。

学生の感想②

障害をも個性として、一人一人のできることをそれぞれがやることで勝利を導く、そのためにお互いを理解しあおうということは、素晴らしいと思いました。

障害のある人もない人も相互に理解しあって、同じ目的のためにそれぞれの役割を果たす「車椅子バスケットボール」は、とても魅力的だと思います。

障害スポーツは、人間の可能性を追求するものだという金子先生のお話には納得させられました。

障害者＝「助けてあげなくてはならない人」という切り口ではない考え方を与えてくれるという意味でも、障害者スポーツの尊さがあるのだなと思いました。

その人がいかに不幸か、可哀想かでなく、その人がその中でどう生きてきたかを見る姿勢は大切だとおもいました。

「障害」などのものさしで人を測るのではなく、その人自身を見るというのは、あらゆる物事に共通して必要なことであると思いました。

学生の感想③

この講演を聞き車椅子バスケットボールの魅力を知るとともに、今のスポーツに必要なものも考えられたように思いました。まず、車椅子バスケットボールの魅力についてですが、その得点システムにすごく魅力を感じました。「4,5点選手が得点を撮れるのは、1点の選手がいるからである。」とおっしゃっていて、そういった関係性や相互理解がとても大きなウエイトをしめていると知り、今のスポーツにもっともっと必要なことであると感じました。なぜなら、健常者の行うスポーツにおいて、ある人がなにができてなにができないかを把握し、相互に深く理解した上で、試合を行うという場面は、そう多くないと思ったからです。一人一人の特性を把握するという点は、今の社会にもまた、足りないものだと思います。自分もできるから、他人もできると思って生活を送っている私にとっては、すごく衝撃を受けたことでもあります。「なんで、そんなことができないの？」とすごく見下してしまっていた自分に気付くことができたような気もします。車椅子バスケットボール同様に、健常者といえどもできるできないや得意・不得意があることは確かで、また、そういったことを理解することができたなら、社会に出ても人の特性をうまく活かすことができるようになるのではないかと気付かされました。

この講演の中で出てきた『リアル』というマンガも全て読んでみました。多くのメッセージが詰められた作品であり、この作品からも多くのことを学ぶことができました。車椅子となり、将来に不安はあるものの今を一生懸命生きる姿がえがかれており、私もこのように「今を生きる」ことが欠けていると思いました。というのも、将来のことばかり考えてしまう私にとって、日々その不安のせいで十分に生きれていなかったように感じたからです。確かに全ての人に不安はあるが、それ以上に今を一生懸命生きることが本当に大事であることもこの車椅子バスケットボールから学ばせていただきました。健常者であることに感謝し、もっともっとやらなければならないとも感じました。障害者になってしまった人ができないことも私はできる。しかし、車椅子バスケットボール選手が人に希望を与えているが、私は人に希望を与えられるようなことはできていない。あるものを無くしてから後悔することがないように、あるうちから全力でやる、そういった姿勢をつけていこうというように感じた講演でもありました。車椅子バスケットボールだから相互理解するのではなく、日々のスポーツや日々の生活の中で、できるものとできないものを把握し、一人一人の特性を活かすことのできるチームを作ることができるようになりたいと思いました。なぜ私にはできないのか、なぜあいつはあれができないのかと非難するのではなく、「あの人はあれができる」という発見をもっともっと増やしていけたらいいなとも思いました。できるからといって高ぶり、できない人を非難するのではなく、できることはやってあげ、できない人のできる部分をうまく活かすことができるようになれれば、本当にいいチーム、会社になると思います。何度も何度も同じようなことを書いてきましたが、それが講演の核心だとも思いましたし、今のスポーツや大学スポーツの可能性、日々の生活をさらに高みへとステップアップできるキーワードのように思いました。できないことが目に見える障害者と違い、できること・できないことが目に見えない健常者にとって、車椅子バスケットボール以上に相互理解の必要性が本当に高いのではないかと思いました。

こういうことに気付くことが乏しいと感じる今の社会で、腹をわってしっかりと相互理解することのできる会社をこれからの就職活動の中で見つけていこうと思う。また例えそういう会社でないところに就職したとしても、私がそういった考えを広めていきたいと思います。本当にためになる講演でした。ありがとうございました。